

肺腺癌脳転移に対し分割照射を計画したが、1 回照射および分子標的薬投与にて腫瘍の消失を認めた一例

志藤里香¹ 小林正人² 富尾亮介¹

1 美原記念病院脳神経外科

2 埼玉医科大学医学部脳神経外科

患者は 78 歳男性。76 歳時、人間ドックにて左肺野の異常陰影を指摘されていたが自覚症状なく経過観察となっていた。78 歳時、めまいと頭痛を生じてかかりつけ内科より総合病院へ紹介され、左下葉に原発性肺癌が疑われ、同時に左後頭葉に 3.5 cm 程度の占拠性病変を認めた。精査にて原発性肺癌 cT3N2M1a Stage 4A と診断され、転移性脳腫瘍に対するガンマナイフ治療目的で当院へ紹介となった。両側後頭葉に 2 か所、左側頭葉に 1 か所の転移性脳腫瘍を認めた。左後頭葉病変は腫瘍体積 11.5ml と大きかったため、左後頭葉病変に対しては 2 回の分割照射を予定した。右後頭葉病変および左側頭葉病変については辺縁を 50%isodose curve で囲み、辺縁線量 20Gy、最大線量 40Gy の SRS とし、左後頭葉病変は 1 回目照射を辺縁線量 14Gy、最大線量 28Gy として治療を行った。当院退院後、原発性肺癌は EGFR 遺伝子変異陽性の肺腺癌と診断され、エルロチニブ (EGFR-TK I) 内服が開始となった。内服加療開始後 1 か月後、ガンマナイフ治療後 1.5 か月の時点で分割照射 2 回目を施行しようとしたところ、腫瘍病変は MRI 画像上ほぼ消退しており 2 回目照射は中止とした。1 回目照射後 9 か月現在、頭蓋内に腫瘍再発は認めていない。近年の分子標的治療薬の開発により原発性肺癌の治療成績は飛躍的に向上した。転移性脳腫瘍に対しても高い奏効率が報告されており、ゲフィチニブ、エルロチニブ投与により転移性脳腫瘍の縮小効果が得られた例の報告も多い。本症例はガンマナイフ治療に加え、分子標的薬による化学療法が奏功したと考えられる。初回の頭蓋内病変の治療検討時に遺伝子診断がついていない場合にどの時期に定位放射線治療を考えるべきなのか、化学療法を先行させた後に考慮すべきかどうかは議論の余地がある。脳転移を伴う肺腺癌に対して、1st Line でエルロチニブを使用した事例は文献的報告が少ない。本症例では化学療法開始後 1 か月で頭蓋内病変の著明な縮小を認め化学療法の効果も多いと思われるが、SRS とエルロチニブの貢献の程度は定かではない。症候性の症例や病変の体積が大きい例では頭蓋内病変に対する早急な治療が必要な場合も多く、現時点では定位放射線治療はその一助となると考えられる。